

# こらっせ便り



2018年4月7日

【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008

Eメール : info@korasse-kanagawa.org

## 今年健康問題に取り組みます

「福島子ども・こらっせ神奈川」事務局長 遠野はるひ

今年の「神奈川リフレッシュプログラム」は8月6日（月）から8日（水）まで、例年通り山北町・横浜市を会場に行います。みなさま、今年もご支援をよろしくお願いいたします。

今年は榎葉小に加え、双葉小でも募集ピラを配布して下さることになりました。榎葉っ子、双葉っ子、そしていわきっ子、どんな子どもたちと会えるか、楽しみです。

着々と準備もはじまっています。2月には学生リーダー3人と事務局の打ち合わせ、3月には「こらっせユース」とともに「ひまわり大使」を囲んでのフクシマ勉強会、第1回実行委員会。5月、7月、8月と実行委員会を重ねていく予定です。

5月6日（日）には、陸前高田市広田町に移住した「こらっせユース」のOB、石渡博之さんを講師に迎え、キックオフミーティングを開催します。この講演会は、5月5日から10日まで開かれる「原発事故8年目 神奈川と福島のいま」展の一環です。

「こらっせ」も7年目を迎え、榎葉町の現状も少しずつ変わってきています。長年親切に接して下さった榎葉町行政のお二人、教育委員会の矢内教育長、社会福祉協議会の松本事務局長が退職されました。学童保育も入れると20回以上訪問した、いわき市の榎葉町サポートセンター・「空の家」も仮設住宅とともに、3月末で閉鎖されました。一方、榎葉町は公営住宅、診療所などのインフラ整備が終わり、スーパーマーケットの建設も予定され、榎葉町南北小、榎葉中学校に通う生徒は111人を数えています。

復興が進められている福島ですが、大人たちは、子どもの健康問題、差別への不安を抱えたままです。2013年から毎年を通りのお母さんたちを対象に行われている中京大学のアンケート調査「福島子ども健康プロジェクト」の直近の報告によれば、「いじめや差別への不安」を感じている親は55%、「健康影響の不安」は45.3%、「保養への意欲」は39.9%という結果が出ており、これらの解決策として「保養」の支援と「放射能健康被害補償法」の制定が提案されています。

私たちも神奈川で何が出来るかを考え、昨年からは福島っ子の健康問題に取り組み、とりわけ子ども・若者たちへの甲状腺検査を徹底するように、国・福島県への要請を強化していこうとしています。引き続きのサポートを！

# こらっせユース

## 春休みに二度学童支援に行きました

3月27日から28日と4月3日から4日の2度、「こらっせユース」(大学生)が、楡葉町の子ども園で行われている学童保育の支援に行きました。第1グループは2日目の午前中に復興が進む楡葉町を案内してもらい、帰還が実現してもなお厳しい事態が続く楡葉町の現状を知る機会もありました。子どもたちと思い切って遊んできました。参加したメンバーの感想です。

### 3月27日～28日

#### 町内を回り被災と復興の現状を知る 高田 隼矢

今回は二度目の学童に参加です。前回はいわき市の空の家だったので、楡葉町の子ども園は今回が初めてです。初めて見た印象は、子ども園はとても綺麗で整備されていることです。1日目はお昼ご飯を食べた後、バスで体育館へ移動しました。普段できない遊びだったと思うので子どもたちも楽しそうにやっていたので

とても良かったです。

2日目は学校の離任式があったため、朝は遠藤さんに楡葉町を車で2時間ほど案内していただきました。7年経った今でも再開発が全然進んでない地区もあり、被災の現状を目の当たりにした感じでした。

その後子ども園に行き、園内で子ども達と遊びました。去年同様、子ども達は本当に元気で好奇心旺盛で、言うことを聞かないこともあったりするものの、すごく可愛いなと思いました。2日間通して貴重な体験ができたと思うので、この体験を行けなかった人にも伝えたいなと思いました。

#### 運動会を一緒に企画 熊谷 健太

今回私達は、運動会を企画しました。人数や学年、男女比、運動の得手不得手など当日のメンバーの情報がない中で種目やルールを作る必要があり苦労しました。当日も時間や人数を見ての臨機応変な運営になりましたが子どもたちも良く話を聞いてくれたり、周りに手助けをしていたりと、とても協力的で助かりました。大変な場面もありましたが、子どもたちの笑顔や彼らが本気で走ったり、考えたり、練習したりと競技に取り組む姿が見られたことが嬉しく思いました。

昼食時やおやつ時間も一緒だったのですが、学生や友達におやつを分けている様子には子どもたちの優しさが現れて、心が温まる思いでした。また、2日目の午前中に案内していただいた楡葉町は、津波が来た場所や天神岬にある高台からの堤防の工事を目にして、報道では伝わらない復興の現状や、今福島が何に力を入れているのかなど、改めて実感する機会となりました。今回は学童を含め新しい経験が多い活動となりました。次回以降の参加が楽しみです。



## 4月3日～4日

### むずかしいブーメラン製作もこなす 内海 克也

僕は今回初めて参加させていただきました。最初行く前は子供達と仲良くなれるかという不安がありました。子供達の方から積極的に話しかけて来てくれたり、ゲームに参加させてくれたりして、すぐに仲良くなることが出来ました。学生が企画のブーメラン製作は少し難しそうでしたが、完成させると装飾を頑張ったり、もう一つ作ったり、投げるのを楽しんでくれました。

お菓子タイムでは、お菓子を分けたり、ゲームの時間では一生懸命に教えてくれて、とても嬉しかったです。子どもたちが話したいこと、やりたいことをたくさん伝えてくれて、僕達も楽しみながら活動することができました。

また、車の中では復興のお話を聞かせていただきました。とても貴重なお話だと思いました。



### 子ども達と遊びほぐれた緊張 古屋 結麻

私は、福島に行ったことがなかったので、学童支援の参加は不安でいっぱいでした。学童に着いて初めて子どもたちと会ったときは、子ども達より私の方が緊張してしまっていたのですが、子ども達と遊んでいるうちにスムーズに馴染んでいくことができました。

2日目になるとみんな温かく迎えてくれて、前日にいなかった子どもとも沢山関わることができました。午前中は体育館でブーメランを飛ばしたり、ドロケイや木とリスゲームなどをし、思い切り身体を動かすことができました。ブーメランを飛ばすのには少しコツがいり、上手くできない子も多かったですが、できる子ができない子に教えてあげている姿も見ることができました。

その後、園に帰りお昼を食べ、ゲームの時間のところでお別れとなりました。お別れの時には「夏のリフレッシュプログラムに絶対参加するね!」と言ってくれた子もあり、楽しんでくれた様子だったので良かったです。子ども達も大学生が来るのを楽しみにしてくれており、私自身もとてもいい経験ができたので、この経験を活かしながら活動を続けていきたいと改めて思いました。

### 「ゆなが来る！」に感動 加藤 柚菜

こらっせの学童保育の参加は二度目です。夏休みに行ってからもう7ヶ月経っているのに、子どもたちは私のことを覚えてくれていただけでなく、前日から「ゆなが来る!」と楽しみにしていたと職員の方から教えていただき、驚きと喜びで胸がいっぱいになりました。子どもたちは、前回会ったときと変わらずとても元気でしたが、前回よりもみんなだいぶ大きくなっていて、いつの間にか身長が私よりも高くなっている子もいました。

私たちが企画したゲームや工作などは、こちらの不手際があったものの、楽しんでもらうことができ、さらに自由な遊び時間にも子どもたちと深くたくさん関わることができました。檜葉町の様子は、大きく変化しているわけではありませんが少しずつ整備されているようで、子どもたちも含め、着実に前に進んでいるのだなと感じました。夏の学童も可能であれば是非参加し、また大きくなった子どもたちの姿が見たいな、と強く思いました。

# 福島の「ひまわり子ども大使」が神奈川へ こらっせスタッフと交流しました

事務局・藤井あや子



3月17日、横浜の神奈川県民サポートセンターで、福島県いわき市の「ひまわり子ども大使」との交流会がありました。もとは深刻な原発事故が招いた出会いですが、終始さわやかで、子どもたちの成長を通してあの震災当時の避難状況と今を知る交流になりました。当時の大災害時、保育所や幼稚園で顔見知りだった子どもたちの背景は様々だったと思います。いわき市の2つ公立小学校を卒業する6人の大使はとてもしっかりいて、自分の体験の思いや考

えをはきはきと述べている姿に感銘しました。

当日は、福島のNPO法人シャロームが各地の支援団体と顔の見える関係をつくり出し、この活動を牽引している吉野裕之さんが引率してきました。吉野さんは子どもたちの思いをさりげなく引き出し、柔和にかつ粘り強く活動の幅を広げていることに感銘を受けました。何といたってもベビーカーを改良して作った放射線測定器で福島現地をくまなく歩いて測定した放射線測定値等の報告は説得力があり、現地の課題を浮き彫りにしたと思います。

この「ひまわり子ども大使」交流の背景には、NPO法人シャロームの「ひまわりプロジェクト」があります。農業授産を取り入れた障がい者施設の立ち上げを計画していたシャロームは、2011年の原発事故で状況は一変してしまい、放射能土壌汚染の明らかな土地での「ひまわり油」の生産は断念せざる得なくなってしまったのです。

## 福島を起点に広がる交流

しかし、県外の支援者との交流で「種を送ってください。私たちがひまわりを栽培し、ひまわり油の原料としての種を送り返しましょう」の提案をもらい、障がい者支援のための授産事業として、また福島と全国の支援者の皆さんとの絆事業として「ひまわりプロジェクト」に取り組むことになったのです。ひまわり栽培を通して生まれた思いやりのネットワークが、栽培協力者との絆を深めるための地域間交流事業に発展し「ひまわり子ども大使」の派遣につながりました。

このような活動を応援している神奈川の団体との交流の間をぬって、私たちこらっせ神奈川の学生スタッフを含む実行委員会のメンバーとの交流の時間をもらいました。交流の後の6人の感想は「お腹がすいた」でした。早速夕食に直行。笑顔が似合う春です。それぞれの進級「おめでとう」を伝えたいです。